



『後漢書』 「儒林伝 上」 訳注

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-12-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯城, 吉信, 矢羽野, 隆男, 山口, 澄子, 横久保, 義洋, 釜田, 啓市 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007769

『後漢書』「儒林伝 上」訳注

本稿は『後漢書』「儒林伝 上」の現代語訳注である。

「儒林伝」は、儒者の伝記をあつめて編纂された列伝である。それは最初の正史である『史記』より始まる。そこには先秦より前漢・武帝期までの儒学の流れが序として提示されており、あげられている儒者は前漢・武帝期までの儒者たちが中心である。

『史記』につづく正史である『漢書』は、『史記』「儒林伝」の形式を踏襲しており、前漢の儒学のながれを序として提示し、前漢の儒者の伝をあげる。その中、『史記』と重複している部分も多々ある。

『後漢書』「儒林伝」は、これら二史のあとをうけ、その形式を踏襲している。王莽以降の儒学のながれを序として提示し、以下、後漢の儒者たちの伝をあげる。本文中、「前書曰」とあるのは前漢での儒者の系譜を明らかにするものであるが、具体的には『史記』『漢書』『儒林伝』よりの引用である。

現代語訳にあたっては、中華書局版『後漢書』を底本とし、併せて王先謙『後漢書集解』（一九一五年虚受堂刊中華書局景印・一九八四年）、『後漢書全訳』（雷国珍 汪太理 劉強倫 訳 貴州人民出版社 一九九五年）、和刻本正史『後漢書』（汲古書院影印・昭和四十七年）などを参考にした。

なお、本稿は、一九九五年年度大阪大学文学部中国哲学研究室で行った勉強会の成果の一部である。勉強会の参加者は、湯城吉信、矢羽野隆男、山口澄子、横久保義洋、釜田啓市の五名である。

『後漢書』列伝卷七十九上「儒林伝 上」現代語訳注

昔、王莽から更始（淮陽王 二三〜二四）にかけての時代、天下はちりぢりに乱れ、礼楽は崩れ去り、経籍も廢れてしまった。光武帝が漢を中興するに及

* 湯城吉信
** 矢羽野隆男
*** 山口澄子
**** 横久保義洋
***** 釜田啓市

んで、経術を愛好し、何よりも先に儒者達を訪ね、散逸した文献を採集し欠落を補填した。これ以前にあっては、四方の儒者達は書籍を携えて、田舎へと逃げ落ちていったのだが、帝のこの活動以降、書物を抱いて京師に集まらないものはいなかった。范升・陳元・鄭興・杜林・衛宏・劉昆・桓榮といった学徒も続々と集まってきた。そこで、帝は五經博士を立て、それぞれに学派として伝えられた解釈を教授させた。易は施・孟・梁丘・京氏の流派を、尚書は歐陽・大小夏侯の流派を、詩は齊・魯・韓・毛の流派を、礼は大小戴の流派を、春秋は嚴・顔の流派を立て、全部で十四博士が立てられた、太常が等級づけ、取りしきった。

建武五年（光武帝 二九）には太学を興し、古えの手本に則って、籩豆・干戚の形式を祭祀の列に備え、儒生の着るべき四角い襟をつけ、礼に適った歩き方をして、恭しい態度で礼の場を歩くようになった。

中元元年（光武帝 五六）、はじめて三雍を建て、明帝が即位して、自ら礼を踏み行った。（この時より秦の制度を革めて）天子がはじめて通天冠をかぶり、日月の文様で飾った衣服を身につけ、天子の行列の儀式を整備し、先づれの威儀を盛んにし、明堂に坐して多くの諸侯王に朝見させ、靈台に登って雲の色や形を望見し、辟雍に於て肩脱ぎになって犠牲を切り裂き、長老たちを尊い養った。饗射の礼が終わると、皇帝は威儀を正して坐し、自ら講話し、多くの儒者は経書を手にしてその前で討論した。正装した高位高官の人で、「辟雍をとりまく堀にかかる」橋の門をとりまいてその様子を見聞きする者は、おおむね億方ほどにも達した。その後、さらに功臣の子孫や四姓（外戚の樊氏・郭氏・陰氏・馬氏）の子弟のために、別に校舎を建設し、すぐれた才能をもつ者を選抜して学業を受けさせた。期門・羽林の武人にまで、ことごとく孝経章句を理解させ、匈奴もその子を入学させた。多く、広く、永平年間（明帝 五八〜七

五)に儒学は隆盛したのである。

【太学】「光武帝紀」によれば、建武五年冬十月に初めて「太学」が建てられた。李賢注所引の陸機「洛陽記」によると、その場所は、洛陽の開陽門外、宮から八里(約三キロ)の位置にあり、講堂は長さ十丈(二三メートル)、広さは三丈(七メートル)であったという。

【三雍】三雍とは、明堂・靈台・辟雍の総称。明堂は、祭祀・朝会などを行う場。靈台は天文を観測する場。辟雍は、三月・九月に郷射礼を行う場で、この名称は、周囿に水を周らして、その形状が壁に似ていることに由来する。

建初年間(章帝 七六〜八四)、多く諸儒を白虎觀に集め、「五經の」異同を検討させ、数カ月にも亘って議論を終えた。肅宗(章帝)は、自ら臨席して裁決を下し、それを天子の命令とした。これは石渠閣の故事と同様である。史官に命じて「白虎通義」を著わさせた。その上に、すぐれた才能をもつ学生に詔して、古文尚書・毛詩・穀梁・左氏春秋を受けさせ、学官を立てていない經についても、すべてすぐれた成績の者を選抜して侍講とし、天子の側近くの役所に仕えさせた。それは、顧みられなくなった学問を遺漏なく集め、様々な学派を後に伝え残すためである。

和帝(在位八八〜一〇五)も幾度も東觀(宮中の書庫)に来て、多くの書籍を閲覧した。「和帝の死後」鄧太后が「政治の実権を握って」臨朝すると、学者はひどくなまけるようになった。その時、樊準・徐防は、学問を重んずべしとの意見を述べ、さらに、儒官が多く適当な人物でないと述べた。そこで、公卿に詔して、人選をくわしくさせ、三署(五官署・左署・右署)の郎で經術を理解できている者は、みな審査のうえ、挙用されるようになった。

【鄧后】鄧后は、光武帝の太学での同窓で中興の功臣である鄧禹の孫。四代和帝の皇后となり、和帝の死後、民間にあった嬰兒(殤帝)を擁立。殤帝が在位八カ月で崩ざると、兄の鄧騭とともに、十二歳の安帝を擁立し、太后として政治の実権を握った。後漢の弊となった幼帝の即位、太后臨朝外戚の専横は鄧后に端を発する。なお、鄧后が臨朝したが故に学者が怠惰になったように見えるが、鄧后自身、風俗の悪化や学問の衰微を貴戚豪家の奢侈専横無学に起因すると考え、挽回策を講じている。一概に学問の衰退を鄧后に帰すことはできない。

安帝(在位一〇六〜一二五)が政治を行ってからは、学芸を軽んじ、博士は席を立てて講授せず、学生は様子を見て、なまけて学校を去り、学舎は荒廃して、ついには野菜畑となり、牧童や草刈りの子供が、その下に薪を刈るまでになった。

順帝(在位一二五〜一四四)は翟酺の言葉に動かされて、校舎を改修し、造築したのは全部で二百四十棟、千八百五十室であった。そして「太学が新たに完成したので」、明經を試験して落第した者は弟子の職を授かり(甲・乙・丙科のうち)甲と乙との科の定員をそれぞれ十人づつ増やし、郡国の老儒を任命して全てに郎・舎人の職を授けた。

質帝(在位一四五〜一四六)の本初元年(一四六)、「夏四月庚辰に」梁太后が詔して、「大將軍より以下、六百石に至るまでの官にある者は、皆その子を就学させよ。毎年、郷射の行われる月には必ず一度、宴を設けて学生達を集め、それを常例とせよ」と。これ以来、太学に学ぶ者はますます増え、三万人以上に達した。しかしながら、章句の学はだんだんと避けられるようになり、浮華を尊ぶ者が多くなり、儒者の美風は衰えてしまった。党人たちが誅殺されて以後、名のある有徳の士は多く連坐して流罪に処された。「その後、諸博士は」はては憎しみあい、争うまでになり、互いに誹謗しあうようになった。その他にも、こっそりと賄賂を贈り、蘭台(書庫)の漆書された經の文字を改竄し、自分の家に伝わるテキストと合致させるものもあった。熹平四年(靈帝 一七五)、靈帝はそこで諸儒に詔を下し、五經(の文字)を校訂させ石碑に刻み、古文・篆書・隸書の三種の書体を用いて互いに参照できるようにさせ、それを太学の門外に立て、天下の学徒すべてに五經の標準とさせた。

その昔、光武帝が洛陽に遷都した折、經書や文書などの宮中に所蔵する書籍は車に載せれば二千余輛にもなったが、これより以後はその数倍にもなった。董卓が都を洛陽から「長安に」遷す際、役人もみな混乱に陥り、辟雍・東觀・蘭台・石室・宣明・鴻都などの書庫から書籍・文書が、最終にはバラバラに棄てられ、そのうち、絹布に書かれた図書の、大きなものはつなぎ合わせてカーテンやホロとなり、小さなものは縫製して袋となった。王允が手に入れて西(の長安)へ運んだものは、わずか七十余輛分しかなかった。「その上」道路が険しくかつ遠かったため、更にその半分を棄ててしまった。その後、長安に戦

乱が起こった際、あつという間に焼き尽くされ、全て灰燼に帰したのであった。洛陽（東漢）の学者はやたらに多いので、すべてを詳しく掲載することは困難である。ここでは、そのうち、よく経に通じた有名な学者を収録するだけにとどめ、儒林篇とした。そのうち、独自に伝を建てた人物については、重ねては掲載しなかった。師承関係において、名を明記して系譜を跡付けるのが適当であるような場合は、それを明示した。

前書（『漢書』「儒林伝」）に以下のようにある。田何は易を丁寛に伝えた。丁寛は田王孫に伝えた。王孫は沛人施讐・東海の孟喜・琅邪の梁丘賀に伝えた。こうして、易に施・孟・梁丘の易学が成立した。又、東郡の京房は易を梁国の焦延寿に受け、梁丘易学とは別に京氏易学をたてた。又、東萊の費直という人物があり、易を伝え、琅邪の王横に授け、費氏易学をたてた。古字に基づいており、「古文易」と称した。又、沛人の高相は易を伝え、子の康及び蘭陵の毋将永に授け、高氏学をたてた。施・孟・梁丘・京氏の四家は皆な博士の官に採用されたが、費・高の二家はまだ採用されなかった。

劉昆、字は桓公、陳留郡の東昏の人。梁国の孝王の子孫である。若い頃に、礼に適った立居振舞を学んだ。平帝の時（前一〜後五）に施氏易を沛の人である戴賓から受け継ぎ、雅琴を弾くことができ、清角の曲を演奏できた。王莽の世に弟子を教授すること、常に五百余人であった。春と秋との饗射（饗宴において射を行う古代の儀礼）の度に儀式を整備し、白木と瓢箪の葉とで俎豆（供物を盛る台と高杯）を作り、兎首の音楽がながれている時、桑の木の弓で、よもぎの茎の矢を射た。（彼が）礼を行う際にはいつも県の長官が下役たちを引連れて見物した。王莽は、昆が多く民衆を集めて私的に大礼（天子の行う礼）を行っているのは、お上を蔑ろにする心があるためだと考えて、昆とその家族とを外黄県の牢獄に監禁した。そうするうちに莽が（反新勢力に）敗れ、免がれることができた。やがて、天下が非常に混乱したので、昆は河南郡の負嶺山の山中に戦乱を避けた。

【清角】『韓非子』十過によると、「清角」の楽は黄帝が作ったものであり、徳の薄い君主が聞くと国を滅ぼしてしまうとある。

建武五年（光武帝 二九）、孝廉に推挙されたが出向かず、そのまま逃れて江陵県で教授した。光武帝はそれを聞いて、すぐに江陵の県令に任命した。折しも、県では数年続きで火災が発生していた。昆が火災の度に火に向かって地にぬかづく、多くの場合、雨を降らせ風を止めることができた。召されて議郎となり、段々と出世して侍中、弘農郡の太守となった。

それより以前、嶠と昭との間の街道筋では虎による被害が多く、旅人は通行できなかった。昆が政治を行うようになって三年もすると、仁政の教化が郡中に広くゆきわたったので、虎は皆な、子を背負って黄河を渡っていった。帝はそれを聞いて優れた人物だと思った。二十二年（四六）、召されて杜林に代わって光祿勳となった。帝は昆に詔して「以前、江陵県令に在任中には、風を退け火を消し、その後、弘農郡の太守となつては虎が北へ黄河を渡った。どのような恵み深い政治を行つてこのような事柄を実現させたのか」と問うたところ、昆は「偶然にすぎません」と答えた。左右に仕える者たちは、彼が素朴で口下手なのを笑った。（しかし）帝は感心して、「これこそが、長者（人格者）の言葉である」と言った。そこで彼の発言を記録させ、そうして宮中に進み入り皇太子や諸王・小侯に学問を教授させた。二十七年（五一）、騎都尉となった。三十年（五四）、年老いたことを理由に辞職を願ひで、詔によって洛陽の邸宅を賜り、一千石の禄で身を終えた。中元二年（光武帝 五七）に亡くなった。

子の軼、字は君文。昆の学業を伝え、その門に集う学徒も多かった。永平（明帝 五八〜七五）年間に太子中庶子となった。建初年間（章帝 七六〜八四）に段々と出世して宗正となり、そうして代々宗正を職務とした。

注丹、字は子玉、南陽郡の育陽の人。（注の家は）代々、孟氏易を伝えた。王莽の時代には、世俗を避けて教授し、学問に専念して官に仕えず、その弟子は数百人にも及んだ。建武（光武帝 二五〜五六）の初めに博士となり、段々と出世して、十一年（三五）、大鴻臚となった。『易通論』七篇を著し、世間では（その書を）『注君通』と呼んだ。丹の学識は精密で深く、易学者は彼を尊んで大儒と称えた。十七年（四一）、在職中に亡くなった。七十歳であった。

その頃、中山の鮭陽鴻（鮭陽が姓）、字を孟孫という者も孟氏易を教授して

名声があった。永平年間(明帝 五八〇七五)に少府となった。

任安、字は定祖、広漢の綿竹の人。若い時に太学に遊学して孟氏易を受け、合わせてそれ以外の幾つかの経書に通じた。更に同郡の楊厚について図讖(神秘的な予言書)を学び、その術を究めた。当時の人々は「仲桓(楊厚の字)を知らんと欲せば任安に問え」とか、「今に居りて古を行うは任定祖」などと称えた。学業を終え家に帰って教授すると、多くの学徒が遠方よりやってきた。以前には州郡に仕えたことがあったが、後には太尉に二度も招聘されたり、博士に任じられたり、公車に召されたりなどしても、皆な病氣と称して就任しなかった。州牧(詔命を奉じて州郡の監察を司る)の劉焉は彼を顕彰して推薦した。折しも(後漢末期の戦乱のため)都への交通路が遮られており、招聘せよとの勅命は結局届かなかった。七十九歳で建安七年(献帝 二〇二)に家で亡くなった。

楊政、字は子行、京兆の人。若い頃から学問を好み、代郡の范升について梁丘易を受けた。経書を説き明かすのに優れ、都では彼のことを「経を説くこと鏗鏗(鐘のようによく響く)たる楊子行」と評判した。教授する学徒は数百人であった。

以前、范升は離婚した妻に訴えられて、罪に触れ、監獄に入れられたことがあった。政はそこで肌脱ぎになって、矢で耳を貫き(赦免を請う態度の表現)升の子供を抱えて道端に隠れ、皇帝の行列を待ち受け、上書を手に地にぬかづき大声でいった「范升は三度妻を娶りましたが、ただ一子あるだけです。今やつと三歳になったばかりのこの子を孤児にするのは可哀想です」と。武騎虎賁は皇帝の馬車を驚かそうとするのかとおそれて、弓を執り上げて彼を射たが、それでもまだその場を立ち去ろうとはしなかった。旄頭が更に戟で政を突き刺し、その胸を傷つけたが、政はそれでもまだ退かず、悲しんで泣き、許しを乞うた。それが帝の心を動かさず、詔を下して「楊生に師(范升)を与えてやれ」と言い、すぐに詔書によって范升を釈放した。政はこの事によって名が知れわたった。

その人柄は、酒を好み、些細な礼節に拘泥せず、物怖じせず尊大であったが、義理に厚かった。当時、帝の婿の梁松(光武帝の娘である舞陰長公主の夫)や

皇后の弟の陰就らは皆その名声を慕って、交際を求めた。政は議論が周到でつけいる隙がなく、屈服することはなかった。以前、楊虛侯の馬武(後漢中興の功臣)のところにいった。武は政に面会するのを嫌がり、病氣だといって寝台からおきあがろうとはしなかった。政は室内に入って一直線に寝台に上ると、武を押しつけ、その腕をつかんで責めた。「あなたは国の恩をうけて諸侯の列に加わっていながら、賢者を求めて陛下からうけた並々ならぬ恩に報いようとも思わず、天下の優秀な人物に対して傲慢に振る舞っている。これは、その身を全うするやり方ではありません。今動いたら、刀が脇腹にくい込みますぞ。」武の子供達や左右に仕える者は皆、非常に驚いて、おどされていると思い、武器を手を執ってその周りに群がったが、政の顔色は平然としていた。偶然に陰就がやって来て、武を責めたて、「馬武と楊政とを」友人にさせた。彼の一本気で物怖じせぬ奔放な態度は、いつもこのようであった。建初年間(章帝 七六〇八三)に官職は左中郎将にまでなった。

張興、字は君上、潁川郡の鄆陵県の人。梁丘易を学びそれを教授した。建武年間(光武帝 二五〇五五)に孝廉に推挙され郎になったが、病氣を理由に辞職して再び故郷にかえって学徒を集めた。後に司徒の馮勤の役所に招聘され、勤は孝廉に推挙し、段々と出世して博士となった。永平(明帝 五八〇七五)の初め侍中祭酒に昇進し、十年(六七)には太子少傅となった。顯宗皇帝(明帝)はしばしば経学について質問し、そうするうちに名声が広く知れわたり、遠方から集まってくる弟子は名簿に記録されて一万人にも達する程で、梁丘易学派の中心となった。十四年(七一)、在職中に亡くなった。

子の魴は、興の学業を伝え、位は張掖属国の都尉にまでなった。

戴憑、字は次仲、汝南の平輿の人。京氏易を学び、十六歳で郡は明経に推挙し、召し出して博士に試験させ、郎中とした。折しも、詔を下して盛大に公卿を集めたところ、群臣は皆な席に就いているのに、憑だけは一人だけ立っていた。光武帝がその理由を尋ねると、憑は「博士達の経の解釈はすべて私に及ばないので、私の上座に座っております。それで席に就くことができないのです」と答えた。帝は、すぐに彼を招いて殿上に上げ、諸儒と討論させたところ、憑は多くの箇所を説き明かした。帝は素晴ら

しいと思ひ、侍中とし、たびたび引見して政治の善し悪しを尋ねた。帝が憑に「侍中は国政を補佐するにあたり、隠してをしてはならぬ」と言った。憑は「陛下は厳しゅうございます」と答えた。帝「朕がどうして厳しいのか。」憑「慎んで思ひますに、前の大尉西曹掾の蔣遵は清廉潔白で、忠孝の徳を具え、学問は古今に通じておりましたが、陛下はよくお調べにもならず、不実の訴えを聞き納れ、そのまま禁錮（任官資格剥奪処分）にいたしました。世間はそれを理由に厳しいと思つて居るのです。」帝は怒つて「汝南のお前は再び徒党を組もうとするのか」と言った。憑は退出すると自分から廷尉に捕らえられた。詔勅が出され、その後再び引見された。憑は謝つて「臣は直言するだけの忠節もないのに、向こう見ずな発言を致しました。生命を棄てて謹んでお諫め申し上げることができず、生をむさぼり無駄に生きながらえており、誠にこの御代に対し面目次第もございません」と言った。帝はすぐに尚書に命じて遵の禁錮を解き、憑を虎賁中郎將にし、侍中の身分でそれ（虎賁中郎將）を兼務させた。

元旦の宮中の朝賀に、百官が一堂に会した。帝は多くの臣下のうち経書を解説できる者に代わる代わるに討論させ、意味に通じていない者があれば、その都度、その者の席を取り上げて意味の通じた者に加えていったところ、憑はかくして、席を五十余枚も重ね敷くことになった。よつて都では彼のことを「経を解きて窮まらざる戴侍中」と評判した。在職十八年で、在職中に亡くなった。詔により、東園で作った梓器（棺桶）と錢二十万とを下賜された。

当時、南陽の魏滂、字は叔牙（という人物）もまた、京氏易を学び、（そして）教授した。永平年間（明帝 五八〜七五）、弘農の太守にまでなつた。

孫期、字は仲瑛、済陰郡の成武県の人である。若くして諸生となり、京氏易・古文尚書を学んだ。家は貧しかったが、母に仕えて極めて孝行で、豚を大きな湿地に飼育し、それによつて母の世話をしていた。遠方の人で彼の学問に従う者は、皆、田のうねで経書を手に執つて彼の後を追つた。集落は彼の思いやりにみちた人となりに感化された。黄巾賊が拳兵（一八四のこと）して、期の集落を通りがかったが約束して、孫先生の家には危害を加えなかつた。郡が方正に推挙しようとして、役人を派遣して羊と酒とを贈り、期を招聘したが、期は豚を追つて草叢の中に入り込んで相手にしなかつた。司徒の黄琬が特別に招聘

したが出向かなかつた。家で死んだ。

建武中、范升は孟氏易を伝え、楊政に授けた。陳元・鄭衆はどちらも費氏易を伝え、その後、馬融もまた費氏易の伝を作つた。馬融は鄭玄に授けた。鄭玄は「易注」を作つた。荀爽も又「易伝」を作つた。これより以降、費氏易が盛んになり、京氏易はとうとう衰えていった。

前書（「漢書」「儒林伝」）に云う。済南の伏生は尚書を伝え、済南の張生及び千乗の欧陽生に授けた。欧陽生は同郡の兒寛に授けた。兒寛は欧陽生の子に授け、（欧陽氏は）世々相伝え、曾孫の欧陽高の時に成り、尚書欧陽氏学とした。張生は夏侯都尉に授けた。夏侯都尉は族子の夏侯始昌に授けた。夏侯始昌は族子の夏侯勝に伝え、大夏侯氏学とした。夏侯勝は從兄の子の夏侯建に伝え、建は（夏侯勝とは）別に（自分の尚書学を）小夏侯氏学とした。三家はどれも博士に立てられた。又、魯人の孔安国は古文尚書を伝え都尉朝に授けた。都尉朝は膠東の庸譚に授け、尚書古文学としたが、まだ「博士の官に」立てられなかつた。

欧陽歙、字は正思、楽安の千乗の人。欧陽生が伏生尚書を伝えてから歙に至るまで八代、みな博士となつた。

歙は学業を受け伝えられており、（また）謙虚で礼儀正しかつた。王莽の時代に長社の長官となつた、更始帝（淮陽王）が即位して原武の県令となつた。世祖（光武帝）が河北を平定して原武に來た時、歙が県で政治を立派に行つてゐるのを見て、河南の都尉に昇進させ、その後、太守の職務を行わせた。世祖が即位するや、やつと（正式に）河南の尹となり、被陽侯に封ぜられた。建武五年、ある事件に連座して免官された。翌年、楊州の牧となり、汝南の太守に昇進した。賢者俊英を挙げ用い、その政治は、並ならぬ功績と称賛された。九年、前の封爵を改められ夜侯に封じられた。

歙は汝南郡において数百人に教授し、政治を執ること九年で、招聘されて大司徒となつた。汝南太守に在任中、（部下の行つた）収賄千余万の件に連座して牢獄に入れられた。生徒は宮門をとりかこみ、歙のために許しを哀願するものが千余人もあり、自ら頭をまるめる者がいる程であつた。平原の礼震は十七

歳、彼は裁きに判決が下るといふのを聞き、都に急ぎ、河内の獲嘉県に着くと自ら捕らえられて、上書して欽に代わって死ぬことを求めた。上書に言う「謹んで申し上げますに、臣の師である大司徒の歐陽欽は、学問においては大学者であり、「その家は」八代に亘って博士でありましたが、收賄によって重罪に処されようとしております。欽の家の一息子は幼く、まだ学を受け伝えることができません。欽が死んだ後は、永久に「その学は」絶えてしまい、上は陛下が賢者を殺したそしりを受け、下は弟子が師からうける学問上の裨益を失うこととなります。どうか臣の身を殺して欽の命に代えて下さいませよう。」上書は帝に奏上されたが、欽は既に獄中で死んでいた。欽の下僚の陳元は上書して、名譽回復を訴えた。その言葉が非常に切実なものでしたので、帝は、棺桶を下賜され、印綬と絹三千匹とを贈った。

子の復が後を嗣いだ。復が亡くなって、子が無かったので、夜国はとりつぶしになった。

済陰の曹曾、字は伯山、欽に師事して尚書を受けた。門徒は三千人、官位は諫議大夫に至った。子の祉は河南の尹であって、父の学業を伝え教授した。

又、陳留の陳弁、字は叔明、もまた欧陽尚書を司徒の丁鴻より受け、仕官しての長官となった。

牟長、字は君高、楽安の臨済の人。その先祖が牟に封ぜられたが、春秋の末にその国は滅んだ。その封地に因んでそれを氏とした。

長は若い頃に欧陽尚書を学んだが、王莽の世には仕えなかった。建武二年（光武帝 二六）、大司空の宋弘は特別に招聘して博士とした。段々と出世して河内の太守となったが、開墾した農地（の面積の申告）が実際とは違っていたことで罪に触れて免職となった。

長が博士になってから（太守として）河内に在るまでの期間、その学生として学習する者はいつも千余人もおり、名簿に記された者はその期間を通じて一万人もいた。「尚書章句」を著し、「それは」全て欧陽氏の尚書の学説に基づいていた。世間はそれを「牟氏章句」と呼んだ。再び召されて中散大夫となった。「病氣療養のため」一年間の休暇を賜ったが、自宅で亡くなった。

子の紆は、在野の身で教授し、その門に学ぶ学生は千人もいた。肅宗（章帝）

はそのことを聞いて彼を召し、博士としようと思ったが、上京の途中で亡くなった。

宋登、字は叔陽、京兆の長安の人。父は由といい、大尉になった人物である。登は若い頃に欧陽尚書を受け伝え、数千人の学生に教授した。汝陰の令となり、政治に明能であり、民は「神父」と呼んだ。趙国の丞相に出世し、「のち」宮廷に入って尚書僕射となった。順帝（在位一二五〜一四四）は、登が礼楽に明るいと理由で、節を持って太学に赴き礼典音律を定めて奏上させた。侍中に配置替えとなり、しばしば天子に意見書を奉り、権臣を抑えようとした。それが原因で、地方に転出させられて、潁川の太守となった。（彼が太守となってからは）市場では掛値する者がなくなり、道では落し物を拾う者もいなくなった。病気で職を免ぜられ、自宅で亡くなった。汝陰の人は、土地神の社に彼を合祠した。

張馴、字は子儻、済陰の定陶の人。若い頃に太学に遊学し、春秋左氏伝を暗誦することができ、大夏侯尚書を教授した。公府に招聘され、成績優秀者として推挙されて、議郎となった。蔡邕と共に六経の文字を校定して奏上した。抜擢されて侍中となり、秘書・禁署を中心となってとりしまり、「彼の意見は」よく優れたものと認められた。多くの場合、状況に即した判断で政治のよしあしを述べた。朝廷は、それを褒めたたえた。丹陽の太守に出世し、恵み深い政治を行って（民を）教化した。光和七年（靈帝 一八四）、召されて尚書となり、大司農に出世した。初平年間（獻帝 一九〇〜一九三）に、在職のまま亡くなった。

尹敏、字は幼季、南陽の堵陽の人。若くして博士弟子となり、初めに欧陽尚書を学び、後に古文尚書を受け継ぎ、合わせて毛詩・穀梁・左氏春秋にも優れていた。

建武二年（光武帝 二六）、皇帝に上疏し、洪範に基づく消災の術を述べた。当時、世祖（光武帝）はちょうど天下統一に着手したばかりで、それに関わる余裕がなく、敏に公車において詔の下りるのを待たせた。（後に）郎中となり、大司空の役所に招聘された。

帝は、敏が経書とその注解とに博く通じていたので、図讖（神秘的な予言書）を校定させ、「かつて」崔寔が王莽のために記録し編集したものを取り除かせた。敏は帝に、「讖書（図讖に同じ）は聖人のお作りになったものではありません。その中には鄙近な文字が多く、世俗の言葉によく似ております。後世の人々を惑わし誤らせることになるのではないかと心配です」と言ったが、帝は聞き入れなかった。「そこで」敏は脱文があるのを利用して「君に口無し。漢の輔たり（「君」から「口」を除くと「尹」、すなわち、尹敏は漢を輔弼する人物だ、の意味）」という文句を付け加えた。帝はこの文句を見ていぶかり、敏を召し出し、その意味をたずねた。敏はそれに答えて、「臣は、先人が図書（図讖・讖書に同じ）を足したり削ったりして見たのを見て、はばかりながら身の程も弁えず、ひそかに万に一つの幸運を得たいと願ったのであります」と言った。帝は強くこれを非とした。結局は処罰されなかったけれども、このために彼は出世できなかった。

「敏は」班彪と懇意で、会（つて語りあ）うたびに、日が暮れても食事を摂るのを忘れ、夜中になっても寝なかった。鍾子期と伯牙と、荘周と恵施とは気が通じ合っていたが、自分たちもそれと同じだとおもっていた。その後、三度官職がかわって長陵の令となった。永平五年（明帝 六二）、詔が下って周慮という男を捕えた。慮は以前から名声があり敏と仲がよかった。敏は連座して獄に繋がれ免官となった。出獄すると、ため息をついて言った「口もきけず、耳も聞こえぬ奴ら（まともな意見も述べず、他人の意見もきかないつまらぬ人々）こそが、まさしくこの世間における人格者なのだ。どうして潔白な私がかんな不幸な目に遇うのだろうか」と。十一年（六八）、郎中に任ぜられ、諫議大夫に出世した。「退官の後」家で亡くなった。

周防、字は偉公、汝南の汝陽の人。その父の揚は幼くして両親を失い身分も卑しかった。かつて、旅籠を建てて旅人に供したが、そのお代を受け取らなかつた。

十六歳の時、郡の小役人として仕えた。世祖（光武帝）が汝南を巡視し、小役人を召し出して経書（についての能力）を試験したところ、防はずばぬけて経書を暗誦でき、守丞となった。「しかし」防はまだ未成年であるという理由で、辞職を願いだた。徐州の刺史の蓋予に師事して古文尚書を受けた。経書に

よく通じていたので孝廉に推挙され、郎中となった。「尚書雜記」三十二篇、四十万言を著わした。大尉の張禹が推薦して博士となり、次第に出世し陳留郡の太守となった。法に触れて免職され、七十八歳で家で亡くなった。子の挙には別に伝がある。

孔僖、字は仲和、魯国の魯の人。孔安国以来、代々古文尚書と毛詩を伝授してきた。「僖の」曾祖父である子建は、若い頃に長安に遊学し、崔篆と仲がよかった。篆が王莽に仕えて建新の大尹となったとき、子建に仕官を勧めたことがあった。「子建が」答えて言った「私には官に仕えず、庶民のままがいいという気持があるし、君には大官に榮達したいという志がある。それぞれが好きなようにする、なんとよいことではないか。既に違う道を歩んでいるのだ。私が今言ったようにさせてくれ。」こうして、故郷に帰り、家で一生を終えた。

僖と崔篆の孫の颯とは、また仲が良かった。一緒に大学に遊学し、「春秋」を学んだ。そこで、呉王夫差の時代のことを読んで、僖は書を置き、ため息をついて「これじゃあ、諺にいう『竜を画くも成らず、反て狗と為る』だ」と言った。颯「その通りだ。昔、孝武皇帝が天子になったばかりの時には、ちょうど十八歳、聖人の道を崇め信じ、先王のあり方を手本とすること、五、六年に亘り、みなは『文・景に勝る（文帝・景帝より勝っている）』と言いはやした。「ところが」後に、我儘勝手になると、以前の善行を忘れてしまったんだ。」僖「書物に書いてあることには、この類のことが多いよ。」（そこに）隣室の学生の梁郁が口をはさんで「とすると、武帝も狗なのか」と言った。僖と颯とは黙ったまま返答しなかった。郁はそれに腹をたてて、ひそかに上奏し、颯と僖とが先帝を誹謗し、今の御代を批判していると訴えた。この事件は管轄の役人へと回され、颯は役人の前に出頭して取り調べを受けた。僖は、今にも捕吏がやってくると思ひ、誅殺されることを恐れ、そこで、肅宗皇帝に上奏文を奉り、自ら己れの罪を訴えて言った。「臣が愚かしくも思いますが、一般に『誹謗』といいますが、その事実が無いのに、偽って有るかのようにはつきりと記されており、日月のように明らかでございます。（私の申しましたことは）書き伝えられた事実を申しにすぎないのであります、事実無根の非難ではございません。そもそも、皇位に在る方が善を行えば、天下の善は残

らず皇帝の一身に集まります。(逆に)不善を行えば、天下の悪は同様に皇帝の一身に集まります。これは、すべてそうなる理由があるのでありますから、他人を責める筋合いのものではございません。ましてや、陛下が御即位以来、政治教化において過ちなく、恩恵を下に加えておられますことは、天下万民の知る所であります。臣らだけがどうして批判いたしましょうか。仮に御批判申しあげたことが事実ならば、本来それを悔い改めるべきであります。もし当たっていなくても御容赦下さるべきであります。どうして罪に問われることがありましょうか。陛下は、政治の根本を追求されず、深く策を練ることもなさらず、ただ個人的な怒りを好き放題にぶちまけて気晴らしをなさっているだけです。臣らは死罪となって死ねばそれまでです。しかし、天下の人はこの事件を見て、考えを改め、これによって陛下の御心の内を穿鑿いたしましょう。今後、たとい宜しからぬ事件を見ても、ついにはその非を口にする者はなくなるでしょう。臣が命を捨ててまで、敢えて正直に申し上げる理由は、心より陛下のためを思って政という大業を大切に考えるからです。もし陛下が御自ら大切だと思召さねば、臣は一体何を頼りにすればよいのでしょうか。むかし、齊の桓公は自らその先君の悪政を言い立てて、管仲を称賛致しました。そうしてはじめて、群臣は誠意を尽くすことができたのです。現在、陛下は十代も前の武帝の事なのに、当時から遠く時を経た今、なお事実を隠そうとしておられます。なんと桓公と異なることでしょうか。臣が恐れますのは、役人が突然におとし入れられて恨みを抱いたまま無実の罪を着せられ、自分で事の次第を陳べる機会が与えられないことです。もし後世の論者が好き放題に陛下を「誰か暴君に」など罵らえることになりましたら、御子孫に後からその事実を隠蔽させることができましょうか。謹んで宮中に至り極罪に処されるのをお待ち致します。「帝は当初より、僖を処罰する気は無かったのだが、その上奏文が奏上されると、すぐに詔を下してその罪を問うことをやめさせ、僖を蘭台令史に任命した。」

元和二年春、帝は東方へ行幸し、その帰路に魯に立ち寄り、孔子廟においてになって、「諸侯の礼によって」牛羊豕の犠牲を供えて、孔子と七十二人の高弟を祀り、六代の音楽を奏で、孔氏の男性のうち二十歳以上の者六十三人を盛大に集め、儒者に命じて「論語」を講義させた。僖はそこで感謝の言葉を述べた。帝は「今日の集まりは、むしろ君の一族の方に尊き誉れがあるのじゃないかね」と言った。「僖は」それに答えて言った。「臣が聞きますに、聡明にし

て聖徳ある天子はみな、師を尊び、道を貴ぶとか。今、陛下は御自ら万乗の天子たる身を屈して、もったいなくも、我が郷里にお越し下さいました。これは、他でもなく先師を崇め、礼遇して、天子たる徳を増し輝かせることであります。「尊ぶべき誉れ」につきましては、「我が一族が」進んでお受けするものではございません。「帝は高らかに笑って、「聖者の子孫でなければ、このような言葉を口にしようか」と言い、こうして僖を郎中に任命し、褒成侯の孔損と孔氏の男女に錢と絹とを下賜し、僖に詔して、帝に従って都へと戻らせて東觀で書物の校勘をさせた。」

冬、臨晋の令に任命された。崔駰が「家林」を用いて占って、不吉だと思い、僖の赴任をひきとめて「君はどうして断らないんだ」と言った。僖は「学問は人のためにするのでなく、仕官には官をえり好みするものではない。吉凶は自分次第である。どうして占いによって決まろうか」と言った。梟に在ること三年で在職中に亡くなり、死後はすぐに葬るように遺言した。

二人の息子の長彦と季彦とは、ともに十余歳であった。蒲坂令の許君然は彼らに勧めて、魯に帰らせようとした。彼らは、それに答えて「今、柩を車に載せて魯に帰れば、「一すぐに葬れ」という」父の遺命に背くことになります。父の墓を見捨てて、この地を去るのは忍びなく思います」と言い、こうして華陰に留まった。

長彦は章句の学を好み、季彦はその家が伝える学問(古文学)を守った。その門に学ぶ学徒は数百人であった。

延光元年(安帝 一二二)、河西にひどく雹が降り、大きなものは、一斗升ほどであった。安帝は、方術を身につけた人に詔を下し、災異を述べ尽くさせた。そうして、季彦を召し出して、徳陽殿で謁見し、帝は御自らその理由を尋ねた。答えていった。「これは、すべて陰が陽を凌いでいる証しであります。今、身分の高い臣下が権力を一人占めし、母君の一派が勢力盛んであります。陛下は天子にふさわしい徳を身につけて、この両者に気を配られるのがよろしいかと存じます。」帝は黙っていたが、近侍の者は彼を憎んだ。孝廉に推挙されたが、就任しなかった。三年、四十七歳で、在野のまま、一生を終えた。

その昔、平帝の時代、王莽は政治の実権を握り、孔子の子孫の孔均を褒成侯に封じ、孔子に追諡して褒成宣尼とした。王莽が敗れると、「孔均は」封国を失った。建武十三年(光武帝 三七)、世祖はまた、均の子の志を褒成侯に封

じた。志が亡くなり、子の損が後を嗣いだ。永元四年（和帝 九二）、封地替えて、褒亭侯となった。損が亡くなり、子の曜が後を嗣いだ。曜が亡くなり、子の完が後を嗣いだ。代々伝えて、献帝（在位 一九〇〜二一〇）の初期になって、封国は断絶した。

楊倫、字は仲理、陳留の東昏の人。若い時に諸生となり、司徒の丁鴻に師事し、古文尚書を学んだ。郡の文学掾となった。幾つかの官職を歴任したが、志が時勢とあわず、世間との折り合いがよくなかったため、辞職してしまった。州郡の出仕せよとの命令に二度と応ぜず、大沢中に講義し、その弟子は一千人あまりにも達した。元初中（安帝 一一四〜一一九）、郡は礼を尽くし招き、三府がそろって召しだそうとし、公車が迎えにきたが、どれに対しても、病氣だといって就職しなかった。

その後、特別に博士の官に召し上げられ、清河王の後見役となった。この年、安帝が崩御された。倫は、すぐに官職をほうりだして葬儀に行き、その皇宮下で号泣し、その声はいつ果てるとも知れなかった。閻太后は勝手に職を離れたとして処罰した。

順帝が即位すると、詔して倫の刑を免除し、こうして「倫は」留まって、「安帝のために」恭陵（安帝の陵）で喪に服した。服喪期間があげると、「倫は」召されて侍中となった。この時、劭陵の令の任嘉は、その在職中に、不正を行い、そのため武威の太守に出世した。後に役人が嘉の莫大なる贈賄罪を奏上した。召し出して廷尉に調べさせると、関係者として、將軍や大臣が百人あまりにも及んだ。そこで、倫は上書していった「私が聞いておりますに、『春秋』では、悪を誅罰するときにはその大本を誅罰し、大本が誅罰されると悪も消えるとのことです。皮衣を振るには襟首を持つものです。襟首を正せば毛並みも整います。今、任嘉は罪にふれておりますがまだ処罰されておらず、みだりに汚れた身分にもかかわらず、武威の長官まで出世して、大郡を治めております。その推薦者を取り調べて処罰しなければ、犯罪の芽はつめません。さきごろ、湖陸の令の張暉、蕭の令の駟賢、徐州の刺史の劉福等は、その汚職が発覚して、皆な罪に服しました。しかし、貪欲な役人が、今に至るまでなくならないのは、彼らを推挙した人物を処罰しないからではありませんか。昔、齊の威王が天下に覇を唱えたとき、姦臣五人、並びに彼らを推挙した者を殺し、そうして恨み

や誇りの根幹を断ちました。切り捨てるべきを切り捨てないのは、『黄石』が戒めていることです。いったい、聖王が、卑しき男女の声にも耳を傾ける理由は、塵が嵩山や岱山に加わり、霧が淮水・大海に集まるようなもので、得にはなくとも、損にもならないからです。陛下よ、この事を心に留め、よくお考えください。」上奏したが、役人が倫の物言いが直接すぎ、言葉も不遜だと考え、帝にはわたさなかつた。尚書は、「倫が機密事項を探知し、そのことよって直言の士だという評価を得んとしております。不敬であるので、三年間の宗廟での新取りの刑に処すべきです」と奏上した。「帝は」詔をだし、倫は度々忠言を進言したということで、特別に赦して、免職にして田舎に帰らせた。

陽嘉二年（順帝 一三三）、太中大夫に召された。大將軍の梁商が將軍府の長史としたが、やかましく諫言し、人と合わなかつたので、出して常山王の後見役の補佐とした。「しかし」倫は病氣を理由に、行かなかつた。「帝は」司隸に詔して、「倫に」出発するように催促させた。倫はそこで河内の朝歌に留まり、自ら上書して言った「留まってここに死のうとも、北には一寸たりともまいりません。「この決心は」首をはねられても変えるつもりはありませんし、「このことで」九たび身を裂かれようとも悔いしません。卑しき男の決心は三軍より強うございます。断固として、お断り致します。」帝は詔を下していった「倫は、微賤の身より高き位にまで登った。特に目をかけて、常山王の後見役としたのに、王命をとどこおらせ、好き勝手に道中に留まり、病氣と称して自分勝手にふるまい、わがままを貫き通している。」こうして、廷尉に召し出され詰問されたが、詔があり、その罪はゆるされた。

倫は前後三度召し出されたが、どれも直諫したためうまくいかなかつた。そののち帰ると、門を閉じ学問を講義し、自ら官界と縁をきった。再び公車が召し出しにきて、へりくだって行かなかつた。家で亡くなつた。

漢が中興してよりのこと。北海の牟融は大夏侯尚書を習った。東海の王良は小夏侯尚書を習った。沛国の桓榮は歐陽尚書を習った。榮は代々その学問を相伝授していき、東京（後漢のこと）時代に最も盛んな学問となつた。扶風の杜林は古文尚書を伝えた。林と同郡の賈逵はこれに訓（注釈の一種）を作り、馬融が伝（注釈の一種）を作り、鄭玄が注解をつけた。こうして、古文尚書が世に盛んになつたのであつた。

一九九六年四月十日受理

* 一般教養科

** 四天王寺国際仏教大学講師

** 梅花女子短期大学非常勤講師

** 岐阜教育大学講師

** 大阪大学大学院博士課程